

南極地域観測統合推進本部 第56回観測・設営計画委員会
議事の記録

1. 日時：令和7年10月21日（火）14：00～16：00

2. 場所：オンライン開催（※文部科学省研究開発局1会議室）

3. 出席委員：

阿部 彩子	国立大学法人東京大学大気海洋研究所気候システム研究系気候変動現象研究部門 教授
◎ 石川 尚人	国立大学法人富山大学都市デザイン学部地球システム科学科 教授
長田 和雄	国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学大学院環境学研究科 教授
勝又 勝郎	国立大学法人東京大学大学院理学系研究科 教授
○ 神田 穢太	国立大学法人新潟大学大学院支援機構大学院改革推進部門 特任教授
坂野井 和代	駒澤大学総合教育研究部 教授
都留 康子	上智大学総合グローバル学部 教授
松岡 彩子	国立大学法人京都大学理学研究科附属地磁気世界資料解析センター 教授
美馬 のゆり	公立はこだて未来大学システム情報科学部 教授
北出 裕二郎	国立大学法人東京海洋大学海洋環境科学部門 教授
前島 弘則	国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構第一宇宙技術部門 宇宙利用統括

(◎：主査、○：主査代理)

4. 議事：

(1) 事務局より、当日の議題・配布資料について確認があった。

(2) 以下の議題について、報告及び審議がなされ、審議事項6～8については総会に諮ることが了承された。審議事項9についてはいただいた御意見を踏まえて後日修正し、主査に了承をいただいた上で、メールで委員に報告することとした。

《報告事項》

1. 南極条約協議国会議（ATCM）の状況について
2. 南極観測実施責任者評議会（COMNAP）の状況について
3. 第66次観測隊越冬隊の現状について
4. リュツオ・ホルム湾の海氷状況について
5. 令和8年度南極地域観測事業概算要求の概要について

『審議事項』

6. 第67次南極地域観測隊行動実施計画（案）等について
7. 南極条約第7条5に基づく事前通告のための電子情報交換システム（EIES）について
8. 令和7年度外国基地派遣について
9. 次期輸送体制の検討について

『その他』

主な意見は以下の通り。

（報告1. 南極条約協議国会議（ATCM）の状況について）

（報告2. 南極観測実施責任者評議会（COMNAP）の状況について）

特になし

（報告3. 第66次観測隊越冬隊の現状について）

【石川主査】

最後に御紹介いただいたブルドーザーの接触による油漏れについて、油は全て回収したと御報告いただいたが、回収した油は最終的にはどのように処理されるか。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

雪を含めてドラム缶に詰めて回収し、これを廃油として持ち帰る。

（報告4. リュツォ・ホルム湾の海氷状況について）

【勝又委員】

西からのアプローチというのは過去に例があるのか。あるいは今回初めてか。

【牛尾国立極地研究所南極観測センターオペレーション室長】

弁天島からしるべ島まで直線を引っ張ったような航路ではなく、もう少し北に回り込む形では、20年ほど前、45次のときに先代「しらせ」が通った実績がある。ただ、その場所だと昭和基地から遠くなってしまい、燃料や大型の物資の輸送には適さないため、できるだけ昭和基地に近い、しるべ島より南のほうに船を着ける想定をしているが、そのためには海の深きの情報が重要なので、新たな情報を得ようとしているところ。

【勝又委員】

承知した。何とか事故なく完了するように願っている。

【石川主査】

何点かお聞きしたい。しるべ島は昭和基地から何キロくらいか。5キロ弱くらいか。

【牛尾国立極地研究所南極観測センターオペレーション室長】

御認識の通り。昭和基地からしるべ島まで直線で4キロほどだが、燃料をホースで輸送するには少々長い距離なのでもう少し基地に近づく必要がある。資料4の図には書いていないが、しるべ島より南に初島というところがある。あまり島に近づくと海は浅くなるため、海の深さに十分注意が必要。さらに「しらせ」は氷を割って進むため、氷の状態や、弁天島としるべ島との間に残っている氷山についても事前に調査する。最終的には「しらせ」が昭和基地に接近したときに、ヘリコプターからの目視によって最終的なルート、航路を決めることになろうかと思う。

【美馬委員】

非常に大変な状況だなと感じたが、これは昭和基地周辺だけの問題か。ほかの国も基地周辺についても同じようなことは起こっているのか。同様に起こっている場合、情報共有や今後の見通しなどについても話し合いを行っているのか。

【牛尾国立極地研究所南極観測センターオペレーション室長】

ほかの場所、ほかの国も基地周辺についてはまだ調べ切れておらず、ほかの国も協力していないこともない。ただ、大陸に近いところまで観測船、砕氷船が入り込むというのはほかの国ではほとんどない状況。十分沖合で、あるいは流氷で夏場に融けるような立地の基地が多いが、昭和基地は御存じのように大陸に近く、湾の奥のほうに位置するところもあり、航路においてこのような状況がほかの場所で起こっているかどうかは、正直申し上げると情報はなく分からない。ただし今回特徴的なことが起こっているため、輸送をはじめ観測隊の行動のために十分サポートする必要があり、また将来このようなことが起こる可能性もある。いつこれが解消されるのかというところは、引き続き現地から得られる情報と過去の観測データや記録も見ているところである。

【美馬委員】

承知した。これが今年だけで解消するかどうかというのも分からないので、今後に向けて様々な調査及び共有をよろしくお願いしたい。

(報告5. 令和8年度南極地域観測事業概算要求の概要について)

【北出委員】

御説明の中に調査経費とあったので大丈夫かとは思うが、確認のため質問させていただきたい。「しらせ」の後継船に関する調査経費ということで間違いないか。海事コンサルのようなものに頼み、スペックや海外の動向といった様々なことを調べるというのはかなりの経費がかかると思い、確認させていただきたい。

【岡田海洋地球課課長補佐】

御認識の通り。そういう内容の経費を今回増額させていただいている。

(審議事項 6. 第 67 次南極地域観測隊行動実施計画（案）等について)

【長田委員】

うまくいくことを願うばかり。氷状が不安定との御説明があったが、DROMLAN の離発着は問題ないのか。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

大丈夫だと考えている。現状、十分離発着ができる状態。

【北出委員】

本議題は行動計画についてなのでいつ質問するか迷っていたが、今回のように海水がなくなってしまう状況というのは、やはり海洋内部の循環の向きが変わっていることもかなり効いているのかなと考えると、リュツォ・ホルム湾での観測計画がどのぐらい入っているのかというのが少々気になった。もともと計画になかったとしても、簡易な観測はしてデータを蓄積しておく、今後こういった海氷がなくなりやすい状況があらかじめ分かるようになっていたほうがいいのかなということと、今後続けて何年もこういった状況になるのであれば、そもそも計画を最初から考え直して組み立てておく必要があると思い、質問させていただいた。

リュツォ・ホルム湾での観測は計画に盛り込まれているのかという質問。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

資料 6-2、42 ページ、別紙 4 の表において、A 案の 1 月の後半以降に海洋観測が入っているが、これがリュツォ・ホルム湾での海洋観測にあたる。海氷状況に関連したデータ取得はここで行うことができると考えている。今回の海氷状況の異常というのが、一つは海氷がかなり大きく割れて流れたところ、もう一つが、氷山の破片のような細かいものが大量に流れ着き乱氷帯をつくったところ。この乱氷帯の形成については、恐らくかなり

ローカルな現象である可能性が高いと思っており、リュツオ・ホルム湾全体の氷床、海洋構造の変化というものがもし影響を及ぼすとすると、流れる方向を想定しなければならないところもある。それに向けてもデータをどんどん積み重ねる必要がある時期かと考えている。

【北出委員】

貴重な機会とも思われる所以、ぜひ可能な限りデータを取れるといいかなと思う。よろしくお願ひしたい。

【坂野井委員】

輸送に関しては空輸のみの場合も想定されており、恐らくこれまでの経験上必要最低限の物資は運べるのかなと思っている。全般的に観測計画ということでお聞きしたいのだが、氷の状況が、接岸時の輸送だけではなく今後の野外観測等に影響を与える可能性はどのように考えているか。接岸時ではなく年間を通しての海氷の状況。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

一つ影響があるのが、例えば越冬期間中であっても南方のラングホブデやスカルブヌス等にルートが延ばせないという状況は十分に考えられる。実際、66次では今年はまだ南方への展開はできていない。そうなると、ラングホブデ等に設置してある機器のメンテナンスが越冬中にできないという意味で影響は出るし、ペンギンのルッカリ一調査についても全てをカバーすることは難しいという状況は考えられるため、影響はあり得る。

【坂野井委員】

承知した。今後ももしかしたらこういう状況が続く、あるいはひどくなっていくという予想も恐らく皆さんしているのではないかと思うので、観測に与える影響も考えながらぜひ議論していくべきだと思う。

【勝又委員】

北出委員の質問に関連して、資料 6-2、42 ページ、別紙 4 の表の見方だが、A 案だったら 1 月 26 日以降に海洋観測があるが、例えば C 案になってしまった場合、海洋観測は輸送の裏で最低限行われるものなのか、あるいはもう全員輸送のほうにかかってしまい観測時間が減少するのか。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

例えば A を断念して D になった場合には、ほぼ輸送にのみ集中して実施することになると思う。人が全てかかるというよりは、船が輸送のために位置取りをし、そこで活動すると

いうふうに制限されるため、例えばリュツオ・ホルム湾内の海洋観測に展開するという行動は難しくなる。氷状が本当に悪く最低限の輸送にかかりきりになる場合には、海洋観測そのものも非常に制限されるという状況になることは間違いない。

【勝又委員】

氷の状況が科学にも非常に大きな影響を及ぼすということを理解した。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

昭和基地の越冬をとにかく成立させるということを最低条件として D 案を組み立てており、これは本当に最悪の場合ということになるが、この場合には観測に影響が出ることは確実である。

【石川主査】

今回の海氷状況を受けて御懸念等もいろいろあったかと思うが、今御説明いただいたことを引き続き今後も御検討いただくとして、本案を本委員会として承認し、次回の 10 月 27 日の本部総会に諮りたいが、いかがか。

(特に異議なし)

【石川主査】

では本案で進めたい。御審議に感謝する。

(審議事項 7. 南極条約第 7 条 5 に基づく事前通告のための電子情報交換システム (EIES)
について)

(審議事項 8. 令和 7 年度外国基地派遣について)

【石川主査】

御質問等がないようであれば、本案を本委員会として承認し、次回の 10 月 27 日の本部総会に諮りたいが、いかがか。

(特に異議なし)

【石川主査】

では本案で進めたい。御審議に感謝する。

(審議事項 9. 次期輸送体制の検討について (資料 9-3 のみ報告事項))

【石川主査】

南極観測全体の意義などもう一度再確認しなければならないということでの御提案だ

と思う。文章量が多いが、御質問また御意見あればお願ひしたい。

まず資料9-2、54ページで南極地域観測事業の目的・意義をまとめていただいた。次に、南極地域観測事業の基本的なプラットフォームとして、昭和基地の必要性、専用船舶の必要性ということで55ページからまとめていただいている。55ページの昭和基地の必要性では、全球的観測網の中での位置づけ、それから昭和基地におけるサイエンスの位置づけ、これまでのデータや昭和基地をベースにした観測調査の継続という意味合いでまとめていただいていると私は理解している。

もう一つの観点は、専用船舶の必要性。昭和基地をベースとして南極観測を続けるためには、船によるアクセスが必須であるという内容。

63ページでは基本的な方向性ということで、今までのものを踏まえてまとめていただいている。昭和基地をメインとして観測する、そのために専用船を保有し、越冬隊によって観測事業を行っていくという方向性の中で、資料に挙げてあるような三つの観点での取組を組み込みながら対応していくということだと思う。

【松岡委員】

まず、今御説明いただいた内容全体について、南極観測事業を継続することを前提とした議論ばかりではなく、今後も継続していくことの意義を時々見直すというのは大変よいことだと思いながら伺っていた。一方で、今後もこの南極観測事業を持続可能な事業としていくために再生可能エネルギーのことが気になり、御質問させていただく。資料では、やはり南極という土地柄、太陽光発電や風力発電はなかなか難しいというか、技術的に困難なことがあるというように伺った。こうした問題がある一方で、私たちの暮らしはだんだん省エネ化が進み、エネルギーを使わないようなものに置き換わっているというのがあると思う。昭和基地や南極において物をリプレイスしていくのはなかなか大変かなとも思うが、今後はエネルギーを使わずに同じことが、またさらに発展的なことができるよう、何か機材の置き換えが進めばいいのかなということを思った。そういう取組があるかどうか、もしあればどのような例があるか教えていただきたい。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

63ページ、1の合理化のところに記述してあるが、基地の維持・管理の合理化という中では、基地の建物の集約化というのが一つ大きな動きかと思う。これまでかなり多くの建物を管理しなければならなかつたところを集約し、それにかけるエネルギーについても負荷を減らす。また再生可能エネルギーについては、風力、太陽光とも安定して電力を得るという

のはなかなか難しいが、これを何とかコントロールできるような仕組みを取り入れ、こういった再生可能エネルギーと、最低限必要な燃料を燃やす形でのエネルギーの獲得もどうしても不可欠なため、このバランスを取りながらうまく組み込んでいくシステムを導入していくことを考えている。

また維持管理の省人化についても努めていくというところで、人数を極端に減らすことはできないが、極力減らしながら昭和基地の管理の負荷も減らしつつ、昭和基地の中でそこに投入するエネルギーを減らす。環境負荷の低減という意味では、これをむしろ戦略的に打ち出すべきであるという御意見もいただいているため、何とかこの方向を押し出しながら今後進めていきたいと考えている。

【松岡委員】

集約化については既に御説明をいただいていたが、それが省エネということにも非常に効率的に効いているということで理解した。

【石川主査】

今御指摘のあった点は、63 ページの合理化のところに書かれている内容で網羅できており、現在既に取り組みがなされており、今後も引き続き取り組むことを期待されていると理解した。

【長田委員】

基本的な方向はもちろん賛成している。一方で、書き手が誰かということによるのかもしれないが、例えば 55 ページ、私は大気環境を研究しているので「地球規模の環境変動の理解」と書いていただけるのはとても嬉しいが、読み手が誰かにもよると思う。昭和基地の環境変動のデータは非常にたくさんあるものの、一般の方々のことを考えると、気候変動に対する基礎データを取っているとか、あるいは直接でなくとも防災や測地に関わるデータを取っているとか、そういう切り口もこの中に盛り込んでおいたらよいのではないかと思う。特に 1 の最後の、仮に昭和基地がない場合に空白地帯が生じ地球規模の環境変動の理解が困難である、というのは、気象データがないと困るよと言ったほうがはるかに楽に伝わるし、地球規模の環境変動という意味で、昭和基地のデータは時定数の短いものがないと困る。しかし CO₂ のような時定数の長いものはまた様子が違う。つまり、環境変動に関するデータは全部同じではなく、環境変動というものが全てを物語っているわけでもないので、ここは言葉を尽くして、各定常官庁の皆さんのがうまく協力してデータを得ないと本当に困るよということを書き込んだらいかがか。その点はすごくもったいないなと思った。誰が読むのか、

誰が書くのかによるかとは思うが、少々もったいなく感じたのが一つ。とりあえず以上。

【石川主査】

今御検討いただいている資料は、今回お寄せいただいた意見も踏まえて、追加や修正をしたいと考えている。長田委員からいただいた意見も踏まえて修正等をしてもらうということでおろしいか、事務局。

【小野寺海洋地球課極域科学企画官】

おっしゃる通り。こちらの委員会でも御意見をいただき、既に輸送計画委員会でも御意見をいただいている。来週開催の総会においても同じ資料を出させていただくが、御意見をいただき、それらを全部踏まえて、一度修正版を作ろうと思っている。メールベースになってしまうと思うが、もちろんまた委員の皆様に御確認いただき、確定したら、先ほど申し上げた小委員会のスタート時にはそこから議論をスタートしていただきたいと考えている。

【長田委員】

もう一つ、例えば専用観測船という話が 62 ページに出てきており、北出先生もおっしゃるかもしれないが、物を運ぶだけではなく観測ができる船がいいというのはやはりどこかに入れておかないといけない。運ぶだけでは用が足りないのだということを書いたほうがいいと思う。これは単に要望。

【北出委員】

全体の計画や方向性はこれしかないのだろうと思う。観測や研究のサイエンスにおける重要性というのはもちろん、もともと南極観測をやり出したところにも既得権といったようなこと也有ったのではと思うので、そういった点を含めると、観測事業を引き上げるということはまずは考えられないだろうと思うし、維持するために「しらせ」は必ず必要、「しらせ」後継船は必要だろうというのはよく分かる。追加で、先ほど御説明の中で昭和基地の越冬が必要か、昭和基地の維持が必要かといった内容もあったので、その点に関して何か検討している事項というのがあるのかと聞きたい。例えば、56 ページの地図上で空白地帯というか、ほかの国が入っていないような地域もあるかとは思う。そのようなところに何かしらの新たな基地を造るといった計画もあってのことでのことで、昭和基地をやめようとしているのか。

【小野寺海洋地球課極域科学企画官】

もし御説明がきちんとできていなかったら申し訳ない。事務局で資料を準備し説明をした中では、昭和基地をメイン基地として維持していくことでどうかという整理であり、昭和

基地をやめて別のところに移ることや、昭和基地もありつつもう一つメインベースとなるような新しい基地を空白地帯に造ることは、今のところは想定していない。

【北出委員】

承知した。現状維持ということでも十分大変なこと。ただし、それをやる意義というのはサイエンス以外にも十分いろいろあるのではないかと思われる所以、実施していかなければならぬのかなと思った次第。ほかにも基地を提案するというのは、今後のことも考えると、もしかしたら状況によっては必要になってくるかなと。むしろ削減、減らすというよりは、増やしていくかなければならないという方向ではないかと感じた次第。

【坂野井委員】

北出委員の御意見にかなり近いが、まず一つ質問、それから一つコメント。質問は、昭和基地について、基本的には現状を維持して効率化等を進めるという御提案だが、前回「しらせ」が入れ替わったときのことを考えると、私は前回の「しらせ」更新のときも多少関わったので覚えているが、結局、今後数十年の日本の南極観測の在り方を決めるものになると理解している。その中で、先ほども質問したが昭和基地で観測を続けていく状況が、あと数十年間はまだ維持できるという見通しでこの計画を御提案されていると理解してよろしいか。

【小野寺海洋地球課極域科学企画官】

その見通しを踏まえての計画である。

【坂野井委員】

海氷状況が悪くなつたときに輸送及び観測に与える影響を含めて、今後温暖化が進んでいったときに、今のところは昭和基地で十分な観測が維持できると考えてよろしいと。

【小野寺海洋地球課極域科学企画官】

今のところはそのつもりで立てている案である。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

海氷状況が不安定化する可能性も見えてきている状況ではあるが、現状では昭和基地を維持することが環境の変動を抑えるために絶対必要であると考える。何とか昭和基地を維持していく、昭和基地をベースに観測していくことを基本にする。

【坂野井委員】

承知した。ではその上で一つコメント。文科省の委員会の場で発言するのが適当なのかは分からぬが、54 ページの南極地域観測事業の目的・意義について、サイエンスとして重

要だというのはもちろん十分書かれていると思うが、第5、第6に当たるか、サイエンスだけではなく、南極地域における国際的な議論に参加するためには、南極観測を国として続けていく必要がある。前回の「しらせ」更新時に、国際的な立ち位置を確立するには南極観測以外に方法がない、という御発言があったのを覚えている。そういうところをもう少し強めに書いておくと、国として昭和基地を維持していく必要性がより分かりやすいのかなと思う。

【阿部委員】

観測基地及び観測船の重要性をはっきりと強く書くというのは大事。そのため、科学研究の意義そのものに立ち返って書いてあるのも大変よいと思う。ただし、やはり時代に合わせて科学研究にとって必要なインフラをしっかりと見ていくということも必要ではないかと思う。気候変動、あるいは環境変動、さらには雪氷域、それに端を発する海面変動などがこれから非常に長きにわたって問題になり、そしてそれは各種政策など国際的な問題、国際的な交渉にも影響を与えるような重要なトピックであるため、その研究をどう充実させるかということも見直す必要があると思う。具体的には、これまで以上に氷床の質量収支に関する各種大気、雪氷、海洋などの研究が重要になってきているため、そのためのインフラ、例えば観測船及び基地だけではなく航空機を上手に組み合わせる、あるいは国際的な協力の下での航空機利用を進める、といったことをしないと、時代に合った、国際的な情勢に合った研究のレベルが維持できないのではないかと思うので航空機に関する検討というのもはっきりと進めることを私は提案する。いかがか。

【石川主査】

文科省からの説明では、具体に、船だけではなくて飛行機も含めて、観測に関わるインフラに関しては、資料9-1、51ページの丸5で検討していくという提案があったと思うが、文科省、いかがか。

【小野寺海洋地球課極域科学企画官】

然り。

【阿部委員】

検討していただいていると思うが、54ページには全く書いてはいないので、きちんと明記したほうがよいと思う。

【美馬委員】

54ページがすごく大事だと思う。目的と意義を文言で書いているが、もっとはっきりと

項目として書いて、それに対して何が対応していくかと後ろに続くと思う。例えば今は、第一に何とか何とかの一つであること、というのを、例えば科学研究の最前線としての南極である、と書くとか。二番目が、科学技術立国としての国際的責務があるとか、地球環境問題へ貢献するとか、科学教育、国民理解への寄与であるとか、平和と国際協調の象徴であるとか、将来の科学的素材とか、そういうことをきちんと強めに、分かりやすくはっきり出して、それで後ろに詳細なものが続いていくということだと思う。そう考えたときに、まずはやはりこのスライドが非常に重要だということ。また、その後はずっと科学と研究の話ばかり。そうすると、先ほど御意見があったほかの可能性というものに対応するスライドは何かあるのか。ないように見受けられる。それは書く必要はないということで、資料には載ってきていないのか。

【小野寺海洋地球課極域科学企画官】

この資料をまとめる一番のきっかけは「しらせ」後継船をどう考えるかということ。後継船を準備するのであれば時間もかかるため、今から、この事業が必要でそのためには後継船も必要だということを整理するためにまとめたもの。

【美馬委員】

そうであるならば、54 ページの六つを推進するのが目的ではないということか。結局、何をするために「しらせ」の後継船が欲しいのか。後継船を作る必要があるから今このスライドを作っているのであれば、スライドの作り方自体が違うと思う。筋、ロジックがねじれているのか、成り立っていないのか分からぬ。「しらせ」の後継船を造ることが本当に大事なのだとということならば、そういう資料もないのか。何かぼんやりしていて、これだとよく分からない。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

54 ページで示している資料自体は、後継船を造るためというわけでなく南極観測を今後とも続けていくための前提を押さえるというスライド。後継船については、南極観測を続けるのであればこういう船が要るという次の段階での表記になるため、書き方としては次の段階で明確に船のためにこれが要るという、というのをまとめる形になるかと思う。

【美馬委員】

しかし次の資料は基地の必要性だが。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

この資料の中ではそういう順番。昭和基地を維持するためには「しらせ」が要るという組

立て。

【美馬委員】

そうなのであれば、その組立てを最初にきちんと示さないと、どこに行くのか分からぬ。私は最初「しらせ」後継船ということよりも目的と意義の六つが大事で、自分たちの存在、南極事業の存在意義を言っていくのかと勘違いしたが。背後にある意図は違うということ。

【伊村国立極地研究所総括副所長】

最終的には次期観測船を造る、そのためにまずは南極観測はこの目的で必要であるという点を最初に持ってきたということ。この先の展開としては後継船という次の段階にしないといけないので性質が変わるというところはある。

【美馬委員】

それがきちんと分かるような資料にする必要がある。今すぐどうしてほしいという案があるわけではないが、とにかく今の資料は分かりにくいということと、全く異なる意図に取られてしまう可能性がある。これでは説得力に欠ける。

【神田委員】

今の南極観測事業そのものの意義というところも大事だが、基本的には62ページの船を造るというところが契機になっている。専用船が必要であるというところのロジックについて、様々な可能性を考えた上で、やはり今の体制のように専用船が東京から現地まで直行するというスタイルが一番よいのだと説得できるように、様々な可能性を考えて比較するとやはり専用船がいいねとなるところがもっと書き込めるといいのかなと思う。具体的にどこが欠けているのかがもう少し言えればよいのだが、ざっくりとしていて申し訳ない。専用船があれば専用船に観測機能をつけられればさらによいという話になってくると思うので、本当に専用船が必要であるというところをアピールすることが非常に大事なのではないかと思う。

【勝又委員】

専用船という文脈で言えば、先ほど阿部委員からあったとおり、高緯度の科学はどんどん重要になっている。今年海洋開発研究機構に「みらいII」という新しい砕氷船が入ることになったそうで、その砕氷船を運航する技術を国として持っておく必要性がある、というのも重要性としてはどんどん高まると思う。そういう意味でも「しらせ」の後継船があるというのは非常に重要だという点に気がつきました。それは例えば砕氷船が二隻あるということが外部資金の獲得にも繋がるかもしれないし、そういう視点もあるのかなと思った。

【石川主査】

様々な御指摘をいただいた。観測船が必要だという点については勝又委員からも御指摘があった通り、必要性をもう少し書き込むべきという御意見もあった。昭和基地の必要性のところでも、昭和基地での観測がもしなければどうなるかという点も書き込むという御指摘もあったかと思う。最初の目的と意義のところにもう少し盛り込む必要があるのではないかという御指摘もあった。これらの点については、文科省で御指摘をまとめていただき、それを踏まえた上で、また確認いただくということで聞いているが、文科省、それでよろしいか。

【小野寺海洋地球課極域科学企画官】

おっしゃる通り。本日いただいた意見を整理したものを、内容に誤りがないかを先生方に御確認いただくとともに、また追加の御意見等があれば大体一週間程度でお寄せいただきたいと考えている。またメールで御連絡させていただく。

【石川主査】

承知した。それでは、資料9-1のスケジュールで進んでいくということで本案を本委員会として承認し、次回、10月27日の本部総会に諮りたいが、いかがか。

(特に異議なし)

【石川主査】

では、本案で進めたい。御審議に感謝する。

資料9-2については事務局からも御説明があったように、今回いただいた意見を一度まとめていただき、文言の修正を御検討いただいて、それをまた委員の皆さんにも御確認いただくというのを踏まえて進めていきたい。また修正等について私に一任いただければと思う。私から確認だが、今回まず一回目の検討をしたが、今後様々な意見を検討しながら、具体的な後継船の観測設営構想等を次回までにまとめるというスケジュールでよろしいか。

【小野寺海洋地球課極域科学企画官】

おっしゃる通り。具体的にはまたこの観測設営委員会で、あるいはこの下に準備会等を設置するかはまた御相談かと思うが、御審議いただくことになる。

【石川主査】

承知した。それでは、資料9-2については今回いただいた御意見を検討し修正を加えた上でまた皆さんに確認もいただくことを踏まえ、本案を本委員会として承認し、次回、10月27日の本部総会に諮りたいが、いかがか。

(特に異議なし)

【石川主査】

では、本案で進めたい。御審議に感謝する。

(3) 事務局から次回の会議日程については、委員の都合を確認の上連絡する旨の説明があ
った。

―― 了 ――